



テニス競技大会レポート

全国高体連テニス専門部常任委員 赤塩 仁

新型コロナウイルスの感染拡大によって、一昨年中止、昨年は無観客で行われたインターハイ。今年は3年ぶりに有観客での開催となり、コロナ禍以前とまではいかないものの、インターハイの華やかさを思い出させる大会となった。ただ、不運にも全国的に日々の感染者数が最多を更新する、まさに第7波真っ只中での開催となってしまった。そのため、高校テニス最高峰の舞台を用意すると同時に、最大限の感染対策も不可欠な状況となったが、高知県のみなさんの多大なご苦勞のお陰で無事に7日間の日程を終えることができた。

※27日に予定していた開会式は中止し、13時30分からの監督連絡会は実施した。

【団体戦】

28日／1回戦・2回戦 会場：男子 春野総合運動公園 女子 東部総合運動公園

29日／3回戦・準々決勝 会場：春野総合運動公園

30日／準決勝・決勝 会場：春野総合運動公園

※台風接近のため決勝戦を8ゲームマッチで実施

朝から強い日差しが照りつけた大会初日の高知市。前夜の雨もあって蒸せ返るような空気の中で大会が始まった。前日予定されていた開会式が残念ながら中止になったため、競技開始に先立って行われる開始宣言を高校生が行うことになった。春野総合運動公園では土佐高校の市吉風音選手が、東部総合運動公園では高知商業高校生徒会副会長の藤村しおりさんが競技の開始を宣言した。



団体戦を振り返ると、男女とも3日間にわたりとてもレベルの高い好勝負が展開され、一言で言えば“実力伯仲”の団体戦だったと言える。1回戦から勝ち上がって来た学校がシード校を倒す下剋上が複数のカードで見られ、まさに戦国時代さながらの団体戦となった。

〈男子〉

第1～第4シードブロックのうち、8シードまでのシード校が順当に勝ち上がったのは、第3シードブロックのみ（第3シード北陸 vs 第6シード慶應義塾の準々決勝は北陸が2-0で勝利）。その他のブロックはどこも波乱含みの展開となった。

第1シードブロックでは、3回戦で第1シードの相生学院が東京学館浦安に敗れる波乱があった。東京学館浦安は、準々決勝で第9シードの新田も破ってベスト4入りを果たした。





第2シードブロックでは麗澤瑞浪が、1回戦で浦和学院を破った勢いのまま、2回戦で浪速を、3回戦では第2シードの大分舞鶴を破る快進撃を見せて準々決勝に進んだ。また、第7シードの岡山理大附が2回戦で岩手に敗れるという波乱があり、その岩手も3回戦で東海大菅生に敗れた。麗澤瑞浪と東海大菅生の対戦となった準々決勝は、麗澤瑞浪が2-0で勝ち、初のベスト4入りを果たした。

第4シードブロックでは、2回戦で昨年優勝の四日市工業が、1回戦で熊本第二を破って勢いに乗る法政二校に敗れるという波乱があった。法政二は3回戦で帯広北にも勝ちベスト8に入ったが、その快進撃もそこまで…準々決勝では第5シードの柳川に敗れた。

ベスト8：東京学館浦安、新田、麗澤瑞浪、東海大菅生、北陸、慶應義塾、柳川、法政二
ベスト4：東京学館浦安、麗澤瑞浪、北陸、柳川

準決勝のひとつは、第1シード相生学院、第8シード新田を相次いで倒して勢いに乗る東京学館浦安と、法政二校の進撃を止めて第4シードブロックを制した柳川との対戦となった。接戦が予想されたものの、結果的には柳川が強さを見せて2-0で勝利し決勝に駒を進めた。もうひとつの対戦は、1回戦からの快進撃で初のベスト4入りを果たした麗澤瑞浪を、順当に勝ち上がってきた第3シード北陸が迎え撃つ形となった。こちらの対戦は大接戦となり、結果的にシングルス2本を8-5と8-6で制した北陸が2-1で勝ち決勝に進出した。

男子決勝は、平成18年以来の優勝を目指す柳川と、初の決勝進出を果たした北陸との対戦。ダブルスは柳川が8-2で圧勝し、シングルス2試合も柳川が押し切るかに思えた。しかし、北陸のシングルス2本が中盤から粘りを見せ、お互いに一步も譲らない緊迫した決勝戦らしい試合になった。最後はシングルス2を柳川が8-6で取り優勝が決まったが、その時点でシングルス1は7-7という展開だっただけに、北陸としてはもう一步及ばずというところ。柳川が強さを発揮し、北陸がその柳川に惜敗…素晴らしい男子決勝だった。



〈女子〉

第1～第4シードブロックのうちシード校が順当に勝ち上がったのは、第2シードブロックのみで、男子同様、女子でもシードダウンが目立った（第2シード野田学園 vs 第7シード第一薬科の準々決勝は野田学園が2-0で勝利）。

第1シードブロックでは、2回戦で第8シードの浦和麗明が宮崎商業に競り負け、3回戦では第1シードの松商学園が鳳凰に敗れた。九州勢対決となった準々決勝は、鳳凰が勝ってベスト4入りを果たした。

第3シードブロックでは、静岡市立が第3シード早稲田実業と第6シードの相生学院を相次いで倒してベスト4入り。



第4シードブロックでは、第5シードの四日市商業が、1回戦を突破して波に乗る白鵬女子に2回戦で敗れた。白鵬女子は3回戦でも山陽女学園を破りベスト8入りを果たしたが、次の準々決勝で第4シードの沖縄尚学に快進撃を止められた。

ベスト8：鳳凰、宮崎商業、野田学園、第一薬科、静岡市立、相生学院、沖縄尚学、白鵬女子
ベスト4：鳳凰、沖縄尚学、静岡市立、野田学園



準決勝のひとつは、鳳凰 vs 沖縄尚学という九州勢対決。九州総体の準々決勝では沖縄尚学が2-1で競り勝っており、鳳凰としては雪辱を期したい対戦となった。しかしながら、沖縄尚学がダブルス8-4、シングルス1が8-3と強さを見せつけて2-0で勝利し決勝進出を決めた。もうひとつの準決勝は、野田学園 vs 静岡市立。3年ぶりの決勝進出と初の決勝進出を目指す対決となった。ダブルスを野田学園、シングルス1を静岡市立がそれぞれ取る接戦となったが、シングルス2を野田学園が8-5で制し対戦成績2-1で決勝戦に駒を進めた。



女子決勝は、沖縄尚学と野田学園の対戦。平成28年に島根県松江で行われたインターハイでも同じ顔合わせがあり、その時には野田学園が2-1で全国制覇を果たしている。双方ともに準決勝と同じオーダーで臨んだガチンコ対決。その結果は、ダブルスを8-2、シングルス1を8-6で野田学園が取り、対戦成績2-0で平成28年以来、6年ぶりの優勝旗を手にした。

【個人戦】

31日／男子シングルス1～4回戦 会場：春野総合運動公園

女子ダブルス1～3回戦 会場：東部総合運動公園

1日／男子ダブルス1～3回戦 会場：春野総合運動公園

女子シングルス1～4回戦 会場：東部総合運動公園

2日／男女シングルス準々決勝・準決勝、男女ダブルス準決勝 会場：春野運動総合公園

3日／男女シングルス、ダブルス決勝 会場：春野総合運動公園



〈男子シングルス〉

振り返ってみると、第1～第8シードのうち5人の選手が3回戦までで敗れ、8シードまでを守れたのは決勝に進出した第8シード薦田直哉（新田）、第3シード高妻蘭丸（大分舞鶴）の2名と第1シードの森田皐介（柳川）の3人だけだった。それだけ実力が伯仲していたというところだろうか。

決勝は、準々決勝で第1シードの森田皐介（柳川）を破った第8シードの薦田直哉（新田）と、昨年の長野で3位、今年も1回戦から順当に勝ち上がってきた第3シードの高妻蘭丸（大分舞鶴）の対戦となった。



第1セットは、薦田が粘り強くラリーを続けて6-4で競り勝った。第2セットに入ると、薦田の安定したプレーに対して、高妻が攻めあぐねてポイントを落とすような場面が多くなった。薦田は次第にリードを広げ、結果的に第2セットも6-2で取り、セットカウント2-0で四国勢としては平成10年（1998年）以来の男子シングルス優勝を果たした。



〈女子シングルス〉

第1～第8シードでシードを守ったのは、第5シードの櫻田しずか（静岡市立）、第6シードの宮原千佳（第一薬科）、そして決勝に勝ち進んだ第3シードの砂田未樹（松商学園）の3人だけ。それ以外の選手は3回戦までで敗れ、男子同様、シードダウンが印象的な結果となった。シードを倒した選手のうち、最も注目されたのが名経大市邨の1年生津田梨央だ。第13シードではあったが、1回戦から4回戦までの4試合で落としたゲーム数はわずか3ゲーム。準々決勝では第5シードの櫻田を8-5、準決勝で浦和麗明の大脇結衣を8-2で退けて決勝に駒を進めた。

決勝は、その名経大市邨の津田と松商学園の砂田未樹との対戦となった。砂田自身は2度目のインターハイをキャプテンとして迎え、春夏連覇



を目指したが惜敗した団体戦の雪辱を果たすべく決勝まで勝ち進んで来た。第1セットは津田があっさり取り、その勢いのまま第2セットも取るかと思われたが、砂田も意地を見せ、第2セットは互いにゲームを取りつ取られつの展開となった。しかし、完璧な守りを見せる津田に対して砂田のミスが次第に多くなり、第2セットは結果的に6-4で津田。セットカウント2-0で津田が優勝旗を手にした。

〈男子ダブルス〉

第9シードの中西・原（岡山理大附）は、準々決勝で第1シード観野・松本（帯広北）を破ってベスト4入り。準決勝では、第5シード若松・前田（相生学院）を倒して勢いに乗る石島・古姓（慶應義塾）を8-6で破り決勝に駒を進めた。第2シードブロックから勝ち上がってきた松岡・當仲（法政二）は、山田・川崎（東海大菅生）との関東勢対決となった準々決勝を制し、準決勝では第6シード五十嵐・齋藤（仙台育英）を8-2で下し決勝戦に進出した。

3セットマッチで行われた決勝戦。第1セットは6-2で松岡・當仲（法政二）。第1セットを終えて法政二校のペアに勢いがあるかに見えた。しかし、第2セットに入ると中西・原（岡山理大附）が猛チャージ。一気に5-2までリードを広げ、このままファイナルセットに突入だと思われた。ところが、そこから松岡・當仲（法政二）が脅威的な追い上げを見せて5-5に追い付き、試合はタイブレークにもつれ込んだ。タイブレークは一進一退の手に汗握る好ゲームになった。最後は9-8から松岡・當仲（法政二）のボレーが決まって第2セットをものにし、セットカウント2-0で勝利した。法政二校がインターハイの優勝旗に名前を刻んだのは、神和住純氏が団単複3冠を達成した昭和40年度大会以来となる。





〈女子ダブルス〉

シングルスで優勝した津田梨央とそのペア成田百那（名経大市邨）が1回戦から勝ち上がり、第4シード畠・藤田（京都外大西）を倒して波に乗る金巻・北原（橘学苑）をも8-2の大差で破って準決勝に進んだ。準決勝

は、津田・成田（名経大市邨）の1年生ペアと団体戦の悔しさをはらしたい吉田・瀬戸（松商学園）との対戦となり、津田・成田が8-4で勝ち決勝戦に進んだ。第2シードの長谷川・藤永（野田学園）は、順当に勝ち上がり、準決勝では第6シード櫻田・小池（静岡市立）を8-3で破り決勝に駒を進めた。

女子決勝は、津田のシングルス決勝があったため、決勝終了の約1時間後に開始された。津田は1時間ほど前にシングルの決勝を終えたばかりだったが、疲れを感じさせないプレーを見せ、第1セットから互いに一步も引かない激しい試合となった。1時間半近い激戦となった第1セットは、長谷川・藤永（野田学園）が6-4で制した。第2セットに入っても競り合いが続き、とうとうタイブレークに突入。タイブレークも激しいポイントの取り合いとなったが、結果的に8-6で長谷川・藤永（野田学園）がタイブレークをものにし、セットカウント2-0で勝利。団体戦と合わせ2冠に輝いた。



終わりに…コロナ禍での2度目のインターハイ。昨年は「完全無観客開催」ではあったが、“開催できただけでもありがたかった”という声がたくさん寄せられた。今年は「有観客開催」であったが、折しも感染力が強いオミクロン株の流行と重なってしまい、選手・関係者が関わるクラスター発生の危険性と隣り合わせであり気苦労が大きかった。その分、大会期間中の感染対策には、高知県のみなさんの工夫やご苦勞（スマホを用いた健康チェックなど）が至るところに見受けられ、まさに頭が下がる思いをした。こうして無事に大会を終了できたのは、高知県実行委員会のみなさん、高知県の先生方、補助員を務めてくれた多くの生徒のみなさんのおかげであり改めて感謝を申し上げたい。来年の北海道では、コロナに振り回されることなく、インターハイに関わるすべての人々が思う存分大会を楽しめるようになることを心から願うばかりだ。



